

その 38

母と子の「原爆の絵」



谷本初登作（広島平和記念資料館所蔵）

「天を抱くがごとく 両手をさしのべし 死体の中に まだ生けるあり」

深川宗俊（『昭和萬葉集』巻7、「群列」、昭和26年）

昭和27年（1952年）4月、サンフランシスコ講和条約発効により、米軍のプレスコードは失効するが、それ待っていたように、阿川氏は、昭和27年7月、最初の長編小説『春の城』（新潮社刊）を出版する。そこに、矢代先生の名で光風先生を登場させて、新人作家の力強い筆で、広島街の惨状を描き出している。光風先生は、実際は家で被爆したが、小説では、家の近くの福屋百貨店の角で被爆し、壊れた建物の下敷きになるところから先生の被爆体験記が始まる。多くの知人友人や被爆者の方から話を聞き、さらには作家の想像力で、ヒロシマの真実を表現するべく書き上げたものだろう。被爆直後の広島街の様子を次のように書いている。

〈然し其処で矢代先生が見たのは、まことに異様な光景であった。家という家が何処までも、見渡す限り、地面へ崩れている。濠々と砂塵に似たものが天地をこめて、太陽は赤い月のように鈍く光り、周囲は死に絶えたように、一つとして動く物の影が無い。道は崩れた建物や瓦礫に埋められて、方角の見当も立たなかった。遠近数カ所に火災の煙が立っている〉

建物の中において被爆した人すべてが、初めて外に出て周りを見渡した時見たヒロシマの街の光景だったのだろう。

〈歩き始めると、初めて背と脚とに^{ひきつる}攣るような痛みが感じられた。背中へ手を廻してみると、ぬらぬらとした血が、土と一緒に掌にべっとりついて来た。腕時計はガラスが破れ、文字盤に血が滴り込んで、針は八時十五分を指して停っていた。耳にあてて振ると、時計の針は、用を済ませたように、ぼろりと落ちた。

先生は家の方へ向ったが、電車通りから大体的見当で家の方へ曲ろうとすると、その先には既に、道らしい所を挟んで、両側から猛烈な火が燃えさかかっていて、それを潜って行く事はとても出来そうには思えなかった。非常の場合は、市の北の方の牛田町にいる同僚の英語のM教授の家へ避難するように、かねて云ってあつ

たから、妻はうまくすればもうそちらへ逃げのびているだろうと先生は思い、自身も牛田へ逃げる事にした。

風下になる事を避けながら逃げなくてはならぬと考え、一寸其処に立留って火災の様子を眺め、煙のなびく具合を見定め、風はやや北風でこちらが風下になる事を確かめると、先生はもう一度、元の、自分の倒れた交叉点の所まで引返し始めた。そして初めて、その辺の瓦礫の下や、道のほとりに、焦げた死体が幾つも転がっている事に気がついた。福屋の旧館の前には、上着の無い陸軍の将校が、脚にあつらえて穿いてみたばかりらしい真新しい長靴をつけ、身体にガラスの破片を無数に突き刺して死んで転がっていた。その直ぐ傍には、年の分らぬ程赤黒く顔を裂かれた素裸の女が、臨月だったらしく、股の間に赤児を脱出して、赤児もろとも死んでいた>

この最後の「赤児」の話は、阿川氏が独自に取材したものか、それとも、作家としてイメージしたものなのか。これまで調べた限りでは、そのような証言なり、手記、記録を見つけることはできなかった。しかし、福屋旧館があった辺り、そして、「赤児」というと、1枚、いや、10枚の「原爆の絵」が思い起こされた。

昭和49（1974）年、1人のお年寄りの被爆者が描いた1枚の絵が、NHK広島放送局に持ち込まれたことがきっかけで、テレビ番組を通じて、「市民の手で原爆の絵を残そう」と呼びかけたところ、1年で、2,225枚に及ぶ絵が寄せられた。それから、約30年後の平成14年、再び広島市と長崎市で絵の募集が始まり、現在までに合わせて4,200枚を超える作品が集まっている。これらの絵は、表現は拙くても、体験者だけが描くことのできる生々しい被爆の惨状を伝えている。この中に、同じ状況を描いたものと思われる原爆の絵が10枚ある。幼児を守るように胸に抱きしめて倒れ込んだ母親の絵だった。この母と子の姿は、それぞれに強烈な印象を残したのだろう、10人の被爆者が脳裏に焼き付いた母子の像を、それぞれの筆致で描き出している。この母と子は、広島放送局の前の路上に倒れていた。つまり、光風先生の家と同じ上流川町だった。もしかしたら、先生は奥さんを探しに家を出入りした時に、この母子を目撃していたのかもしれない。阿川氏は、この母子の目撃証言を聞いて、想像を膨らませ、「赤児」の話を書いたのかもしれない。

そして、『ヒロシマはどう記録されたか』の取材の過程で、この話には、さらに隠れたエピソードがあることが分かった。

広島が被爆した後、「あの日、ラジオで空襲警報や警戒警報があれば、あれほど市民が死ぬことはなかったのに」と、広島放送局や軍を批判する声があったという。東京、大阪をはじめとする米軍のB29による大規模の空襲は全国の地方都市に拡大したにもかかわらず、敵機の編隊は、広島市の上空を通過するだけで、不思議なことに広島のみ空襲を免れていた。市民は、それに慣れっこになる一方、移民説など様々なデマや憶測が乱れ飛び市民の神経はくたくたになってもいた。

この朝広島中央放送局の2階にある第2スタジオには、前夜からの宿直当番の古田正信アナウンサーがいた。以下は、古田アナウンサーの手記「原爆の日のマイク」（昭和27年）や広島中央放送局の「原爆被災史」（昭和41年）に基づき、古田アナウンサーや技術部職員からも直接取材したあの日朝の記録である。

古田アナウンサーと2人の技術部職員は、中国軍管区司令部内にあった特設放送室での当直を終え、朝7時過ぎに放送局に帰ってからも、司令部の防空作戦室から新たな敵機侵入の情報が矢継ぎ早に入ったため、宿直用の二段ベッドで仮眠をとることもできなかった。かっさり8時、警戒警報解除の放送を終えて、一息入れに、第2スタジオから同じ2階にある放送部の部屋に戻った。

その途端、情報連絡室から合図の鐘を聞いた。司令部から情報が入った時、アナウンサーに知らせるための鐘である。古田アナウンサーは、急いで情報係のところへ駆けつけた。

「8時13分、中国軍管区情報。敵大型3機、西条上空を西進しつつあり、嚴重な警戒を要す」

古田アナウンサーは廊下を歩きながらサーッと原稿に目を通し、スタジオに入るなりブザーを押した。

時に8時15分、「中国軍管区情報。敵大型3機、西条上空を……」

ここまで読んだとき、メリメリッという烈しい音とともに、鉄筋の建物がグラッと傾く感じがして、フワァッと体が宙に浮き上がった。

「いけない、直撃だ！」

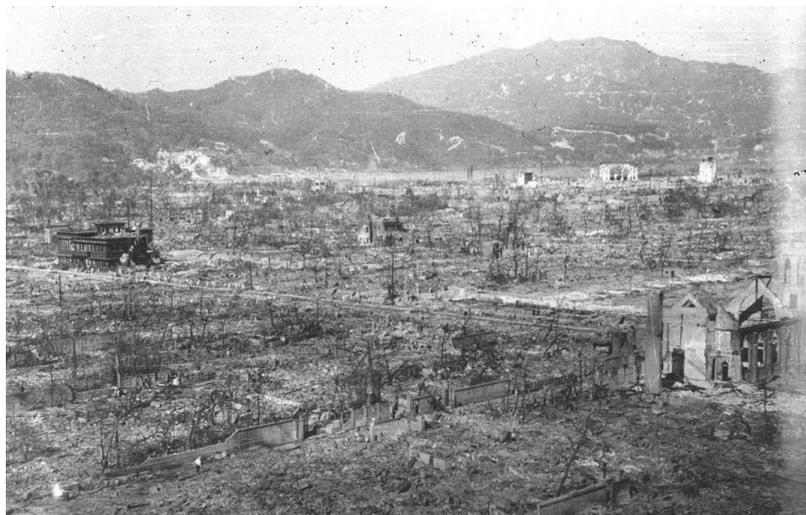
爆風のためか、息もつけられないほどの恐ろしい瞬間が、どのくらい続いたのか分からない……

暗黒の底で、「まだ生きている……」と感じたときは、頭から粉々の破片を浴びながら、ただ呆然と立ち尽くしていた。

何も分からない闇の中で、そのとき瞬々とたちこめた塵埃を透かして、屋根がふっとんで骨ばかりとなった、むきだしのスタジオが見えた。目の前にあったマイクロフォン、ストップウォッチはおろか、テーブルまでが影も形もない。スタジオの爆風よけの厚い鉄筋の壁は、すっかり崩れ落ちて、部屋の中ほどまでせり出していた。

こうして、警戒警報の緊急放送は、アナウンスの途中で断となったのである。古田アナウンサーは、スタジオが壊滅して放送ができなくなったため、前夜籠っていた広島城地下の軍司令部の特設放送室に向かおうと、放送局の瓦礫の間を縫って外に飛び出した。その時古田アナウンサーはわが目を疑った。放送局だけが直撃されたと思っていたのが、街が崩壊し、放送局の玄関前の通りには、何人もの人々が折り重なるように倒れていた。そしてその中に幼児を抱いたまま死んでいた母親の姿を目撃して息を呑んだ。「赤児」である。

被爆した広島中央放送局→
その前の路上に母と子が



しかし、広島城にある軍管区司令部に急がねば、と足を踏み出そうとした途端方向を見失った。いつも見慣れた広島城の天守閣が……天守閣が消えてなくなっていた。砂塵の中に見失ったかと思い改めて目を凝らす。やはり、ない。今の爆弾で、天守閣が吹き飛ばされた……？

それからしばらく後、局内にいた技術部の職員一同は、重傷を負った同僚や無線中継受信の機器などを抱えてそろうて退避することにし、外へ逃れ出た。そこで彼らも生涯忘れることのできない光景に出会うことになる。彼らの目の前、玄関の低い石段を、全身真っ赤にした幼児がはい上がろうとしているのである。

「玄関でね、赤ん坊がですね、全然黒いところがない、白いところもない。全部真っ赤、綺麗な真っ赤ですよ。もう一皮剥けたのですよ」

文字通りの「赤児」だった。

技術職員の 1 人は、被爆前に、この子に会っていたことを思い出した。ここで亡くなっている 10 数人の人々は、局の前で、ラジオの受信機の修理のため順番を待っていた人たちで、その中に母親に抱かれた赤ん坊がいたことを覚えていた。彼は、「生きてくれよ」と祈りながら、その子の頭をさすった。「赤ん坊の頭の温み、そして、被爆前に玄関で見たつづらなひとみなど、いまでも私の心と掌に残って私の心を苦しめる」

抱えていた受信機を置いてでも、その赤ん坊を助けてやるべきだったのか……たとえ幼い命を救うことはできなかったとしても、と、悔やむ。

もう 1 人の職員は、その子を抱き上げた、が、やはり……

「それで私は抱き上げたのですけどね。もう、ズラツというでしょう。死んだ人も、傷を負った人も……そこで、これがこの子の母親ではないかなと思う人の所へ持っていったわけですよ……」

冒頭の歌、「天を抱くがごとく 両手をさしのべし 死体の中に まだ生けるあり」は、言うまでもないが、この母と子を詠んだ歌ではない。しかし、わが胸から這い出したわが子を求め手を差し出した母の手に思えてならない。そんな母の手に、その職員は、「赤児」を戻してあげた。こうして、母親と思われる女性の胸の中で、「赤児」は息を引き取ったのだろう。

その後、その母子の姿を目撃した被爆者 10 人が、その姿を、数 10 年も後に絵に残したのである。



田口光子作（広島平和記念資料館所蔵）

矢代先生こと、光風先生の『春の城』の物語に戻る。

くその日の夕方近くなって、先生は牛田の M 先生の家にとどり着き家の中に担ぎ込まれるが奥さんは逃げてきてはいなかった。そして、翌日、傷と発熱とでけだるい体を無理にひきづって焼け跡を探しに出かけた。妻がいつも買物をしていた通り、更に長い時間を掛けて高等学校から宇品の方まで探しに出かけたが、夕方に

なって空しく牛田のM教授の家へ帰って来た>

そして、光風先生は、8月31日に原爆症で息を引き取るが、小説の中では、その場面は次のようである。

く矢代先生も死んだ。先生の身体の火傷は、初め只腫れているだけであつたが、奥さんの骨を探しに行つて帰って来た頃から、漸くジクジクと味噌のように崩れ始め、次の日には更に進んで、腐りかけの水蜜桃のような糜爛^{びらん}状態を呈し、其処が痒く、かつ痛んだ。蠅が始終それにたかつて離れなかつた。町に出来た救護所では、薬が足りなくなつて、赤インクを傷に塗るという話であつた。

終戦の報を聞いた頃から、先生の頭は毛が脱け始め、日と共に脱毛は甚だしくなつて、半月程経つと、手でこそぐ度に束になつて脱け落ちた。禿頭病になつたのかと思つているうち、間もなく歯齦^{はぐき}から出血が始り、上唇の中程が裂け、咽の奥からも血が出て、痛みの伴わぬしつこい下痢も始つた。下痢便には血が混つた。先生は、疎開先から帰つた二人の幼な子と、M教授と、郷里の従弟とに看まられて、その年の8月の末に、広島市の郊外の病院で死んだ。先生の死は、傷そのものより、傷ついた身体で、放射能の残つた土地の上を、翌る日1日中歩き廻つたのが原因であらうと云われた。奥さんの行方は遂に分からなかつた>

(以上、『春の城』、昭和27年7月、新潮社刊)

かつて、小説『八月六日』の「作品後記」に書いたように、「後遺症の問題にも触れてゐない」からGHQの検閲を通つたのだが、原爆プレスコードが失効した、ここでは、「放射能による後遺症」について詳細に記述している。この阿川氏初の長編小説『春の城』は、昭和52年第4回読売文学賞を受賞している。

いわゆる原爆文学と呼ばれる作品群がある。広島、長崎への原爆投下という不条理で未曾有の悲劇を体験した、被爆作家や歌人、詩人たちの小説、短歌、詩による作品である。一方、被爆体験を持たない作家たちによる作品もいくつかあるが、被爆直後から、いわゆる被爆作家に先駆け、原爆プレスコード下で原爆小説を書き発表したのは阿川氏1人と言っても過言ではないだろう。昭和54年に、被爆者に襲い掛かる原爆症の実態を描いた小説『魔の遺産』を著すが、市民レベルの反核運動には意識的に距離を置き、それ以降阿川氏は、「原爆のことに触れるのはやめてしまった」のである。また、阿川氏の一連の原爆小説を原爆文学という領域から排除する動きがあつたことも確かだつた。しかし、高度の作家性をもって原爆の悲劇を表現したこれらの作品は、原爆文学の至宝であり、貴重な記録文学であることは言を俟たないだろう。

ところで、阿川氏の旧制広島高校以来の親友で、海軍予備学生として入隊した京大分隊の大浜巖比古氏は、『雲の墓標』の主人公、吉井巖氏など他の面々とは離れて、長崎の川棚海軍工廠で、特攻隊震洋の訓練にあたつていたと思われるが、敗戦後は郷里の天理市に復員している。それがいつのことかは不明だが、遺弟を自称する坂本信幸氏は「2、3日死んだように眠つて、起きたら明日香をまず訪れた、というような随筆を読んだ記憶があります」という。大浜氏にとっては、何はともあれまずは万葉だったのである。

阿川氏の小説『雲の墓標』では、鹿島という名で登場する大浜氏に、次のように語らせている。

<敗戦後すでに2か月が経過いたし、唯、茫々たる想いに駆られるばかりであります。私は復員後郷里を出て、僅かな金と友人知人をたよりに、あてのない放浪の旅をして歩いております。京都の教室へ還りたい志

はありますが、今は未だ其の気になる事が出来ません。(略) 私にはあまりに大きい打撃でありました>

(『雲の墓標』、昭和 31 年、新潮社刊)

小説の形を取ってはいるが、阿川氏が、大浜氏から直接聞いた話だろう。これらの小説を読む限り、長崎から復員した大浜氏が、亡くなる前の光風先生に会っている形跡はない。光風先生の被爆死を聞いて一体何を思ったのだろう。大浜氏にとっては、そのことも、「あまりに大きい打撃」の 1 つだったのではなかろうか。その後、大浜氏は被爆した広島的女性と結婚し、男 3 人、女 2 人の子に恵まれた。

ところで、阿川氏は、亡き光風先生を偲んで、先生の歌を 1 首思い出し、エッセイに書いている。

「あらざの^{あけみ} 朱実を食めば ややしし 山深く来て われは嘆かふ」

<仲間で先生を囲んで、鳥取県との県境に近い道後山といふところへ一泊旅行に出かけた時の詠草で、帰途、先生が、「これで当分また、楽しいことも無いね」と、言はれたのが印象に残った。時節が時節だし、田舎高等学校の教師の勤めに鬱屈されるところもあつたらうと思ふ。

いつごろからか知らないが、先生はひそかに自分の研究のまとめにかかってをられたはずである。しかし、さういふことは少しも口にせず、我々嘴の黄色い若者どもにいつも快くつき合ったださった>

(『私の中の日本人—中島光風先生』、昭和 50 年)

あらざは、イチイの木の別名で、鮮やかな朱い実をつけるが、私たちが知っているのは、「あらざ」より「アララギ派」の方だろう。アララギ派とは、もともとは正岡子規に始まり、短歌雑誌「アララギ」に集まった歌人の一派で、大正、昭和、平成を通じて近代短歌の発展に貢献した、とされている。当時の編集発行人が、土屋文明氏。その名を聞くと、阿川氏のあの歌が思い起こされる。

「巖比古は 開店早々の ビヤホールより ジョッキを 3つ かつぱらひ来ぬ」

この歌に、じきじき朱筆で、「かかるものが歌になると思い給うや」と添削して送り返してきた土屋氏である。この歌は、アララギの歌風には合わなかったのだろう。

その土屋氏が、『昭和萬葉集』の監修／選者の筆頭にクレジットされていることから歌集の責任者であることが分かった。そしてこの滑稽歌は言うまでもなく、同じくアララギ派だった光風先生や大浜巖比古氏、次回紹介する広島高師付中の瀬群先生のいずれの歌も、『昭和萬葉集』に掲載されることはなかった。被爆歌人の歌は収めても、被爆前の広島の歌や歌人、つまり、被爆死した歌人の歌には興味関心がなかったのか。

前述のエッセイに阿川氏が「先生はひそかに自分の研究のまとめにかかってをられたはずである」と書いたのが、被爆死される半年前に刊行した『上世歌學の研究』だったのだろう。同書の刊行は、昭和 20 年 2 月だが、「はしがき」の日付は 19 年 3 月と、刊行の 1 年前に書かれている。阿川氏が、中国に出征する途次、光風先生に最後の別れをしに訪ねた折、つかんだ感触だったのか。それとも、「はしがき」に書かれた壮行の宴に、阿川氏も出て感じた印象だったのだろうか。

<この間時局は加速度的に緊迫の度を加へ來たり、殊に昨年十二月には學徒出陣のことがあって、教へ

子たちの多数が大挙、大君の御楯として召されていったのは感激のきはみであった。入隊に先だち、もとの主任學級の連中が二十數名、私のせまい家に集まり、くさぐさの山のさち海のさちを持ち寄りて一夕壮行の宴をもよほしたのは、中でも印象の深い思ひ出である。

「兵にゆく 心はすでに さだまりて つどふこよひの うたげたのしも」

といふやうな歌も詠んだことであつた。前線に出動し、又すでに壮烈な戦死をとげた教へ子たちも何人かを数へる。一方學園内外も日を追うて緊張し來たり、すでに學徒の常時勤勞體制も下命せられるにいたり、私自身いつ筆を折って直接戦力増強に動員せられるやうになるかわからぬといふ現状である。もちろん自分でも及ばずながらその覚悟は十分にできてあるつもりであるが、ともあれこのやうな雰囲気の中にあつて、勤めの餘暇をぬすんではこのやうな仕事をつづけて來ることのできた幸福を思うとともに、それだけ又なにか悲壯な感じもするのである。とにかくやれるあひだにやれるだけの仕事をしておいたら後に悔いは残らないであらう>

(『上世歌學の研究』、昭和 20 年 2 月、筑摩書房刊)

この「はしがき」からも、戦局が厳しくなる中での執筆、編集がいかに大変だったか目に見えるがごとき筆致である。そして、刊行から 35 年近く後の昭和 54 年、光風先生の師風を慕う、かつての万葉輪講会や短歌会などの門下生の手で、遺歌集「中島光風歌集」が編まれている。たまたま、同じ年に、『昭和萬葉集』も刊行されている。「はしがき」には、すでに紹介した歌 2 首も載っているが、光風先生としては、これらの歌が、同年に出版された『昭和萬葉集』に掲載されることより、「中島光風歌集」が出版されたことの方がはるかに「幸福」だっただろう。「やれるあひだにやれるだけ」やった仕事が、教え子たちの手で、アララギの朱実の花のように実ったわけだから……

本土決戦に備えて設立された第二總軍があつた広島城に背を向けるように立つ歌碑がある。中島光風歌碑である。そこには、「はしがき」に書かれた 3 首の歌の内、1 首が刻まれている。

「出で征きし 教え子どもの 誰れ彼れが 心に乗りて 朝な夕なに」

2 度と還つてくることがないかもしれない教え子たち 1 人 1 人を、朝な夕なに思い詠った光風先生。

その先生が原爆で亡くなり、特攻隊に出た大浜氏が生きて帰り、そして、中国で特務に従事した阿川氏が半年後にヒロシマの地に生きて復員した。

まさに運命の皮肉である。



広島中央公園
「広高の森」に建つ中島光風歌碑